

＜小学校 国語＞

伝え合う力を高める話し合う活動の指導

－話材の選定や学習形態の工夫を通して－

糸満市立光洋小学校教諭 宮 城 美智子

内容要約

伝え合う力を高めるために、「話す・聞く」の学習指導において、児童の興味・関心に合わせた話材の選定や、話しやすい場になるような学習形態の工夫を取り入れた。相手意識・目的意識をもった話し合う活動で、実感としての自己評価や相互評価を行うことで、受容的な雰囲気ができ、意欲が高まり、話し合うことの大切さや楽しさを味わうことができた。

その結果、みんなが意見を出し合うようになり、「話すこと・聞くこと」の基礎・基本の力が付き、伝え合う力が高まった。

【キーワード】 話材 学習形態 実感としての評価 話し合う活動 伝え合う力

目 次

I テーマ設定の理由	11
II 研究内容	11
1 伝え合う力	11
2 伝え合う力と話し合う活動	12
3 話し合う活動を活発にする工夫	12
4 話し合う活動と評価	14
III 授業実践	14
1 単元名 話し合って、意見をまとめる	14
2 教材名 無人島でくらすとしたら（光村 4 上）	14
3 単元設定の理由	14
4 単元の目標	15
5 単元の指導計画と評価計画	15
6 本時の指導計画	17
IV 研究の考察	18
1 話材の選定で、話し合う意欲が高まったか	18
2 学習形態を工夫して、話し合いを活発にすることができたか	18
3 話し合う力が付き、伝え合う力が高まったか	18
V 研究の成果と今後の課題	20
1 研究の成果	20
2 今後の課題	20

伝え合う力を高める話し合う活動の指導 －話材の選定や学習形態の工夫を通して－

糸満市立光洋小学校教諭 宮 城 美智子

Ⅰ テーマ設定の理由

「伝え合う力」とは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力である。国語科では、伝え合う力を付けるために、相手や目的、場面や状況などに応じ、自分の言葉で考えたり判断したり表現したりして、問題を解決できる言語運用能力を育成することが重視されている。「話すこと・聞くこと」の内容の中でも、児童相互のかかわりが最ももてる話し合う活動を活発にすれば、伝え合う力を高めることができる。

ところが、授業中は、積極的に発言する何人かの児童と、不安と緊張の入り交じった表情と自信のない声でぼつりぼつりとしか発言しない児童に分かれていく。後者は、相手や目的、場面や状況に応じてどのように言語を使えばいいのかとまどい、自信がもてずに消極的になっているのだろう。どの児童にも人の話を興味をもって聞き、話されたことについて考え、考えたことを筋道立てて伝えていくという学習活動を日常化していく必要がある。そうすれば、児童が、互いに学習の中で話し手と聞き手になり、安心して話し合ううちに伝え合う力がはぐくまれ、その力の高まりが、ひいては問題を解決する力の高まりにつながっていくであろう。そういう視点からも、やはり伝え合う力は重要な言語能力である。

また、互いに相手を認め、聞き手の立場に立って話題や話し方を考えて話せる、話し手の身になって心を傾けて聞ける、このような学級の受容的な雰囲気は、国語科の学習に限らず大切なことである。そのために、どの児童にも話す機会や聞く機会を多く設けることが必要になってくるのである。

そこで、授業の中にさまざまな相互行為的な話し聞く状況を仕組み、計画的な段階を設けた指導を行うため、次の二つの観点に力を入れて指導したい。まず、児童の心の高まりが期待できるように、興味・関心をもって、指導事項を明確に位置づけられるような話材の選定の工夫。次に、一対一の対話、少人数グループでの話し合い、それから学級全体での話し合いというように活動経験の広がりや充実を図り、相手意識・目的意識をもたせる学習形態の工夫。これら二つの指導の工夫によって児童が自信をもって話し、興味をもって聞き、活発に話し合い、互いに伝え合う力を高めていけるのではないだろうか。また、これらの学習活動の中で行った評価を、次の指導に役立てながら系統的に学習を進めたい。

そこで、話材の選定や学習形態を工夫し、話し合いの力を身に付けさせれば、伝え合う力が高まるであろうと考え、本テーマを設定した。

＜研究仮説＞

話し合う活動において、話材の選定や学習形態を工夫し、話し合いの力を身に付けさせれば、話し合う活動が活発になり、伝え合う力を高めることができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 伝え合う力

学習指導要領は、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図っている。児童同士、児童と家族、児童と地域の人々の間に「話し言葉」を媒介にして互いに心を通じ合わせることができることは、豊かな人間関係をはぐくみ、生きる力にも通じるものと思われる。「伝え合う力」は児童の側からとらえると、楽しく主体的に学び合う中で知らず知らずのうちに身に付く力であり、教師の側からとらえると、生きて働く国語の力を付けるための教師の意図的・目的的なかかわりを考える際のキーワードと言える。国語科では、言葉で伝え合う能力を育成するため、「話すこと・聞くこと」の他に「書くこと」「読むこと」の指導を意図的、計画的かつ調和的に行うとし

ている。特に「話すこと・聞くこと」の領域についての授業作りでは「伝え合う力」を視点として「相手意識」「目的意識」「場面や状況意識」「方法や技能意識」「評価意識」を指導案上に位置づけ、言語活動例を具体化していくが必要になる。

2 伝え合う力と話し合う活動

互いに言葉で伝え合う活動は、話し手と聞き手が双方向的に話し合う活動の中でこそ指導が生きてくる。もちろん、話し合いが活発にできるためには、筋道を立てて話すことや、話の中心に気を付けて聞くことなどの基本的な内容の指導が欠かせない。基本的な内容を教科書の「学習の窓」なども活用しながら、学年に応じて指導するうちに、伝え合う力が同時に身に付いていくのである。

3 話し合う活動を活発にする工夫

(1) 意欲を高める話材の選定

学級の中で、あることを話材にして話し合う時、そのことについて積極的に話す児童は、生活体験が豊かであったり、読書で予備知識があったりしている。学級のどの児童にも話したいと意欲をかき立てることのできる話材とはどのようなものだろうか。たとえば、どの児童にとっても身近な話題や、みんなが同じように経験している話材を提供してみる。すると、どの児童も興味をもって話したり、友達はどんなことを話すだろうと関心をもって聞く活動ができる。教科書教材を基に児童に身に付けたい国語の力の観点をしっかりもちながら、学期や年間を通じて話材を工夫したい。

表 1 教材選定

	1学期	2学期	3学期
○ ● 教 選 科 定 書 教 教 材 材	○ 写真を見て ○ 友だちっていいな 「こんなことしたいな」 ● 友達とできるだけ長く話そう (対話) ● みんなと話そう (一人対多数) ○ 無人島でくらすとしたら	● さいころトークをしよう ○ 心に残る発表会をしよう 「十さいを祝おう」 ○ 電話で約束	● 今週のピカイチニュース座談会をしよう ○ 伝えよう、わたしたちの心 『『伝え合い』を考える会を開こう』 ○ 自分で選んで 「ごんぎつね」「動く絵の不思議」

(2) 学習形態の工夫

学習形態の工夫として押さえておきたいのは、「対話から話し合いへ」ということである。まず初めに一対一の対話によって、話したり聞いたりすることに安心感をもたせたい。それから、グループでの話し合いの中でも必ずみんなが話すように工夫する。グループで話しやすくなったところをとらえて、質疑を入れてみる。グループでよく話すようになったところで、いよいよ学級での話し合う活動を入れていく。このように、対話から話し合いへと人数が増える過程では特に、教師は、一人一人の変容に気を配り、どの児童も多少の抵抗はあっても、徐々に話したり聞いたりする学習活動が身に付くように支援しなければならない。児童にとって、学級での話し合いは、大勢の前で発言することには抵抗があるようだが、発言を聞くということは大抵できる。そこで、学級全体の話し合いの中で交わされた意見や考えを基にして、もう一度話しやすい場であるグループに返してみる。そこでは、学級の話し合いの中に出てきた友達の考えと、自分の考えとの相違点や共通点を比べながら話し合うことができ、話し合いの深まりが期待できる。そして、いずれの学習形態も「聞き手がよく聞くこと」にポイントを置いて学習活動をさせたい。聞き手がよく聞けば、話し手は話しやすくなるし、もっと分かるように話す工夫も出てくるだろう。

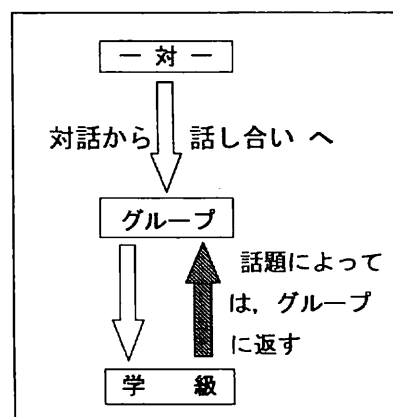


図 1 対話から話し合いへ

(3) 話し合う力を付ける

① 音声言語の指導

「話すこと・聞くこと」では、明らかに発信することのできる力付けをしようとしている。しかし、自己主張することのみを強調しているということではない。相手や目的・場面や状況を意識して話し合い、聞き合うことの大切さを強調している。また、音声言語の重視は、決して音読や朗読の重視を指しているのでもなく、「肉声で話し合うこと」の重視を指している。

音声言語を通して「伝え合う力」を育成するには次に挙げる四つの観点からの工夫を加えたい。

- ・相手意識や目的意識を鮮明にし、人間関係を重視した話し合いの工夫
- ・継続的、日常的な取り組みの工夫
- ・単発的な計画だけでなく、各学期ごとの系統的な指導の場を設定するなどの年間指導計画を作成する工夫
- ・日常の生活に役立てていく工夫

などを踏まえて、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言葉を通して適切に表現したり、理解したりする力を育てるための学習を展開していきたい。

② 相手意識・目的意識が必要になる場を設定する

児童はおしゃべりが好きでよく楽しんでいる。しかし、おしゃべりは、仲間内だけに通じる取り立てた目的もない活動である。また、相手が話している内容にじっと耳を傾けて聞いているとも限らない。そのおしゃべりから対話へ発展するには、「相手意識」「目的意識」をもたせることである。児童一人一人が、「〇〇さんに聞いてもらいたい」「理解してもらいたい」という意識から話す必要感に駆られ、目的をもった対話が始まる。誰に向けて、何を話したいのかという目的がはっきりすると、分かりやすいように話し方を工夫しようとする意識も強くなる。しかし、それは状況によって変化する。また、話し手と聞き手の関係によって話し合いの形態も変化する。授業では、様々な異なる話し合いの形態や場を、学年や目的に応じて適切に設定することが大切である(図1)。また、いろいろな目的のために要点を聞き取ってメモし、そのメモを基に筋道を立てて話すなど、話し合う活動に発展していくことも望ましい。

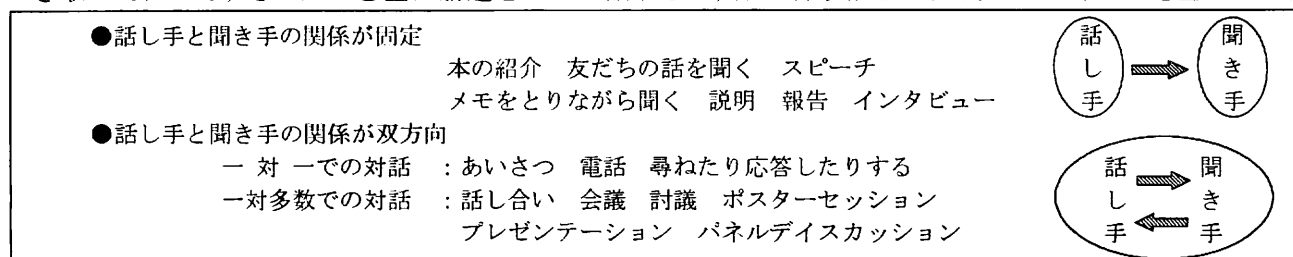


図1 話し手と聞き手のかかわり方

③ 「聞き合う力」が「話し合う活動」を高める

「話し合い」は「聞き合い」とあるといわれている。多人数の話し合いを想定した場合、一人の話し手に対して、必ず多人数の聞き手がいることになる。その多人数の聞き手が話し手の内容を受け止め、聞き合い、よりよい方向に向かって内容を練り上げていくことが、話し合いの目的である。人間は生まれてから、まず聞くことで環境の様々な音や様子を知るものである。そう考えると、話す指導の前に聞く力をしっかりと身に付けさせたい。聞き手の聞き方がよければ、話し手は、聞き手によく分かってもうためにどのように話せばよいかという工夫をするようになり、意欲もわいてくる。授業の中に、話し手と聞き手の両方が相手をより理解したい、もっと分かってもらいたいという受容的・能動的雰囲気ができることで、話し手・聞き手の相互作用が現れ、いよいよ話し合う活動の素地が用意されたことになる。そこをとらえて話し方・聞き方・話し合いの仕方の技能的な指導をする。

④ 人間関係・言語環境を整える

話し合う活動の力を付ける指導がうまく機能するためには、学級の人間関係や言語環境を整えることが大切になってくる。そこで、学級経営の基本として、互いの個性を素直に認め合える人間関係づくりを心がけたい。授業の中においても、互いの考えに対する認識を深め、温かい人間関係づくりにつなげることである。教師自身も言葉遣いに気を付けることはもちろん、児童の誤りを親切に教え励まし、勇

気づけてやるようにする。また、休み時間などに、児童がよく使う一語文に対しても、主語と述語のはっきりした文章で用件を話すようにさせたり、必要な言葉を教師が補って再度話させるなど、根気強く指導していくことで言語環境を整えていきたい。

4 話し合い活動と評価

(1) 実感としての評価

「話すこと・聞くこと」は、主に音声言語による学習活動である。そのため、その場で感じ取ったり、気づいたりしたことを評価する、いわば実感としての評価が重要になってくる。特に話し合い活動においては、児童同士のかかわりの場面が多くなるので、教師は、その時間で身に付けさせたい国語の力の観点について、実感をもった評価ができるように工夫したい。観点をはっきりさせるよさは、評価がただ単に「声の大きさ」や「原稿を見ないで言えた」などの技術的なことの評価に終始しないで済むところにある。その方法として、毎時間ごとに国語のどんな力を身に付けさせたいかを、系統的な評価基準と照らし合わせて確認することである。

(2) 自己評価・相互評価

話し合う活動においては、自己評価、相互評価は効果的な評価である。児童自らが、自己評価を行うことで、目標が明確になり、「うまくいった」、「うまくいかなかった」という自分の評価が、次の時間や次の単位では、「またがんばろう」、「できるようにしよう」という意欲につながっていく。また、相互評価は、身近な友達からの評価でもあり、良さをさらに改善するとよい点などが伝わりやすい。相互評価として「聞き取りメモ」を活用すると、相手の話を熱心に聞くことができるようになり、互いに話しやすくなるので、受容的な雰囲気づくりにもなる。特に、メモしたことを基に自分の思いや考えを言葉で書いて評価し合うと、数値による評価とは違い、言葉のもつ温かさまで伝わるだろう。また、話し手と聞き手の互いの良さや、ここはこうしたらなどの意見を交換することは、それ自体が話し合う活動としても生きてくる。そして、その中で人とのかかわり、友だちを受け入れたり、支え合ったりする気持ちが育ち、次の話し合う活動へのよい雰囲気づくりにもなる。このような評価活動は、学習過程中に次の学習活動へと生かされていくものになることから、効果的と言えるのである。

Ⅲ 授業実践

- 1 単元名 話し合って、意見をまとめる
- 2 教材名 無人島でくらすとしたら（光村 4 上）
- 3 単元設定の理由

(1) 教材観

本教材は、「無人島に持っていける七つの道具」を話し合いによって決めていく「話すこと・聞くこと」の小教材である。無人島に一週間暮らすという、まだ経験のないことについての話し合いではあるが、ゲーム的な内容なので、どの児童にも取り組みやすいであろう。また、児童が自分のこれまで経験したことを基にしながら考えを出し合えるので、いろいろな考えの出しやすい教材でもあり、話し合い活動を活発にできる教材である。

(2) 児童観

本学級の児童の〈話材〉〈話し合う学習形態〉に関するアンケートの結果。

〈どんな話材について話し合いたいか〉

児童の多くは、話し合いたい話材として、「自分が分からないことについて」を選んでいる。また、「いろいろな考えが出てくるようなこと」を選んだ児童も多いことを考え合わせると、「無人島という知らない島にグループで出かけるための道具選び」という話材に、児童は意欲をもって取り組むだろう。話し合いに慣れてない児童にとっても、楽しく参加できるであろう。

自分が分からないことについて	53%
いろいろな考えが出てくるようなこと	39%
自分だけが知っていること	19%
その他：生き物・動物	5%

〈話し合うとき楽しいと感じる学習形態〉

右の結果の理由として、「2人だったら、話すことがなくなったりする」「グループだとみんなの話が聞きやすい」「グループだと話がまとまりやすいし

一対一の対話が楽しいと感じる	16%
グループの話し合いが楽しいと感じる	78%
学級の話し合いが楽しいと感じる	6%

いろんな意見が出て、しかも出すぎないから」などがあり、すでに4年のめあてである「意見をまとめる」ことを意識した児童がいることも分かる。つまり、グループでなら話すことに抵抗のない児童の実態が見える。そこで、本教材で、グループの話し合いから、学級での話し合いへと学習形態を広げることによって、相手意識・目的意識をもった話し合いの力を身に付ける必要がある。

(3) 指導観

本学級の児童の多くは、グループの話し合いが楽しいと感じている。そこで学習形態として、まず、話しやすいグループで一人一人が発表し合い、無人島に持っていくものを話し合って決める。そのとき、目的意識として、「無人島で一週間元気に暮らすために、必要な七つの道具を話し合って決めること」をきちんと押さえる。次に、学級での話し合いで、グループが協力しながら決めたことを発表し、質問などにも答えていく。そのとき、「無人島でどんなことをして暮らしたいかなども加えて発表するように」指導する。「話す力」として「自分が持っていきたいものを分かりやすく話すことができる」・「聞く力」として「友達の考えをきちんと聞き、書き留めることができる」・「話し合う力」として「互いの考えの共通点や相違点を考えながら、意見をまとめる方向で、進んで話し合うことができる」ように指導していく。それらの指導によって、伝え合う力に近づくものと期待できる。また、音声言語は実感としての評価が大切なことを踏まえて、毎時間の中でワークシートを使った自己評価や相互評価を取り入れ、指導に生かしていきたい。

4 単元の目標

◎「無人島でくらすとしたら」という話題で話し合い、自分たちの意見をまとめる。

評価規準

〔関心・意欲・態度〕

○「無人島でくらすとしたら」という話題に興味をもって話し合いに参加しようとしている。

〔知識・理解・技能〕

○互いの考えの同じところや違うところを考えながら話し合っている。

5 単元の指導計画と評価計画

時	本時のねらい	学習活動	教師の支援・留意点	評価規準 □ 評価の観点 () 評価方法	☆できた子への手立て ★あまりできなかった子への手立て
1	「話し合いの手順」と「話し合いで大切なこと」に気を付けながらグループの名前を決める。	①「無人島に一緒に行くグループの名前をつけよう」という観点で自分が考えた名前をグループで、理由を付けて発表する。 ②グループで話し合い、決める。 ③学級 みんなに決まった名前を発表する。	・3年で学習した「話し合いの手順」と「話し合いで大切なこと」を意識して話し合うことを押さえる。 ・多数決や何となく好きだからという決め方ではなく、観点にあった名前という視点で話し合って決めることを押さえる。 ・次時より、このグループで話し合って、無人島に行く計画を立てることを確認し合う。	㊦ 自分がつきたい名前を理由を付けて話そうとしている。 (ワークシート)	☆グループの発表の練習をさせる。 ★観点をつかませ、名前とその理由を考えさせる。
2	学習課題をはっきりさせて、学習の見通しをもつ。	①冒険や、無人島での暮らしに興味をもつ。 ②「無人島に行く計画を立てよう」という学習課題	・実際にある冒険物語「エルマーの冒険」の内容を話題にすることで、児童の好奇心や冒険心を呼び起こす。	㊦ 学習の見通しをもつことができる。 (ワークシート・自己評価)	☆書いた子は発表させる。 ★書いた子の発表を基

	<グループ> をつくる。 ③地図上の地名を名づけて理由をつけて発表し合いながら、島のイメージを明確にする。 ・CDを聞く ④学習の計画を立て、見通しをもつ。	・相手意識（グループのお友達、学級のみ）や目的意識（無人島に持っていく七つの道具について決めること）をもたせる。		とにして、自分のものを書かせる。	
3	無人島で一週間をどのように過ごしたか、一人一人の考えを出し合う。 <グループ>	①各グループに分かれ、それぞれに進行係を決めて話し合いに入る。（進行係を置かなくてもよい。） ②教科書 p50を読み、各自でどんなことをして過ごしたいか、そのためにはどんなものが必要かを考える。 ③グループのほかのメンバーの考えを聞いてワークシートにまとめていく。	・自分の考えをワークシートに書いていくことで整理してから発言するようにする。同様に、友だちの発言も、ワークシートにメモすることでよく聞くようにさせる。	関 無人島に持っていくたいものを楽しく考えることができる。 知 分かりやすく話すことができる。 知 友だちの考えをきちんと聞き、書き留めている。（ワークシート・自己評価・観察）	☆メモに取った友達のよさを分かりやすく話して伝える。 ★机間指導により、話し合いのしかた・メモの取り方をアドバイスする。
4	グループで持っていく七つの品物を、話し合って決める。 <グループ>	①グループで話し合うときの注意点を確認する。 ②品物を七つ選ぶにあたり、具体的にどのような観点で話し合いをすればいいのか確認する。 ③話し合いをする。 ④各グループで決まったら、七つの道具を使って過ごす島での生活について、話し合ったことを島の全体図の中に書き入れていく。	・学習の窓「意見をまとめるための話し合い」を読み確認し合う。 ・「話し合いの観点」として、まず共通に求めている品物はないか。 ・現地にその代わりになるものはないか。 ・それはないと困るものなのかあるとよりよいものなのか。 ・個人的な希望か、みんなの生活に役立つものか。 ・削った品物は、どんな理由でそう決めたのかをメモし、後の発表の際にそれについても触れると、どのように意見をまとめていったかが分かる。	知 互いの考えの共通点や相違点を考えながら、意見をまとめる方向で、進んで話し合うことができる。（ワークシート・相互評価カード・観察）	☆「話し合いの観点」にそって意見をまとめさせる。 ★自分の意見と友だちの意見の共通点・相違点に気づかせる。
5 6 （ 本 時 ）	各グループで話し合ったことについて発表し、みんなで話し合うことができる。 <学級> <グループ>	①グループごとに、無人島でどのようにして一週間過ごしていくかも合わせ、持っていく七つの道具を発表する。 ②発表を聞いて質問したり、感想を発表したりする。 ③質問や感想を基に、もう一度持っていく七つの道具についてグループで話し合う。	・無人島の挿絵を黒板に掲示して発表させるとよい。 ・七つの道具については、名称だけではなく、絵に描いたものを用意して臨ませるとより楽しい発表になる。 ・聞いている児童にも感想や質問を求める。工夫点を評価しあったり考えを交換しあったりする場としたい。そのためにもメモを取りながら聞けるようにする。	知 自分が参加した話し合いを通して、これからの話し合いで気を付けることを考える。（ワークシート・自己評価・観察）	☆よりよい話し合いのしかたに気を付けて話し合わせる。 ★友だちの発表のよさを見つけるように声かけをする。

6 本時の指導計画

(1) 本時のねらい

○グループで話し合ったことについて発表し、みんなで話し合うことができる。

(2) 本時の授業仮説

- ① ワークシート(メモ)を基に発表することによって、分かりやすく話すことができるであろう。
- ② 発表するグループの話をメモを取りながら聞くことによって、要点を押さえて聞くことができるであろう。
- ③ ①・②をもとに、学級やグループで話し合うことによって、話し合いが活発になるであろう。

- (3) 準備 (教師) 無人島の地図 ワークシート 各グループで決めた七つの道具をまとめた表
(児童) 教科書 学習ノート(ワークシート) グループの旗

(4) 展開

時間	学習活動	◎教師の支援・留意点	評価
導入	・本時のめあてをもつ - 各グループで話し合ったことについて発表し、みんなで話し合う。	◎これまでの学習を振り返る。 ・話し合いで大切なこと ・意見をまとめるための話し合い ◎ワークシート(メモ)の説明をする。	・めあてをきちんとつかんでいるか。 〔ワークシート〕 - 観察
展開	・各グループで話し合って決めた七つの道具を発表する。 ・発表を聞きながら、「もう一度聞きたい」「付け加えたい」「質問したい」などをメモに取る。 ・メモを基にしながら、質問をしたり意見を言ったりする。指名されたグループは、相手に分かるように答える。 ・いくつかの意見と比べながら、もう一度、持っていく七つの道具について、グループで話し合う。 ・話し合って決まった七つの道具を発表する。	・8つのグループが次々に発表するので、質問などを後で思い出せるようにメモにとっておくことを話す。 ・いろいろな質問や意見を発表させるように配慮する。 ・もっていく道具が変わったグループは、ワークシート②に赤ペンで訂正する。 - わたしたちのグループは、最初に決めた道具になったね。	・発表を聞きながらメモを取っているか。 ・進んで話し合いに参加しようとしているか。 ○グループで話し合ったことについて発表し、みんなで話し合うことができたか。 〔観察〕 ・これからの話し合いで気を付けることについて考えることができたか。
まとめ	・今日の話し合いを振り返って、感じたことを発表する。 ・ワークシートに自己評価をする。	・自己評価をするとき、観点にそって評価ができるようにさせる。	

(5) 授業仮説の検証

① 授業仮説①ワークシート（メモ）を基に発表することによって 分かりやすく話すことができるであろう。

- ・グループで話し合う前に、一人一人が自分の考えを、理由を付けて書き出すことによって、グループで話し合うときには、全員が自分の考えを話すことができた。
- ・発表の基になるワークシートが、グループでの話し合いの時にメモを取りながらまとめた内容だったので、道具とそれを持っていく理由が結びつき、発表をしやすくなることができた。
- ・話を聞きながらメモを取ることで、自信をもって質問をしたり意見や感想を発表したりすることができた。

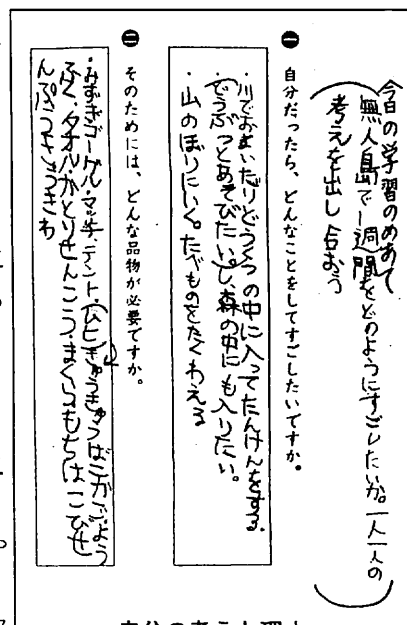
② 授業仮説②発表をするグループの話をメモを取りながら聞くこと によって、要点を押さえて聞くことができるであろう。

- ・他のグループの七つの道具の発表を聞いて、質問したいことや感想などをメモすることになっていたが、90%の児童が、何らかの形でメモを取ることができた。中には、7グループ全部

についてメモを取ることができた。また、その後の話し合いが活発になったが、それは、メモを取りながら聞こうとすることで、考えながら聞くことができたからと考察できる。

③ 授業仮説③①・②をもとに、学級やグループで話し合うことによって、話し合いが活発になるであろう。

- ・本学級は、進んで発表をする児童が少ない学級である。にもかかわらず、本時で発表をした児童は31人（84%）に上った。これは、話し合いがしやすいグループでの話し合いで自信をもち、学級での話し合いにも進んで参加できた児童が増えたためと考察できる。発表の様子も友達の発表を聞いて質問したり、付け加えの発表をしたり、活発な話し合う活動が見られた。



自分の考えと理由

IV 研究の考察

1 話材の選定で、話し合う意欲が高まったか

研究の導入における話材は、学校や家庭・地域社会など、児童の身近な出来事や経験といった話しやすい話材の選定に努めた。「友達とできるだけ長く話そう」や「みんなと話そう」などは、教科書にない話材だが、みんなが話しやすく、また聞こうとする内容なので、興味をもって取り組むことができた。児童が意欲的になれる話材として、身近なものはもちろんだが、想像力を働かせながら話し合える内容のものや、いろいろな考えが出てよい内容のものなどが挙げられる。

2 学習形態を工夫して、話し合いを活発にすることができたか

まず、一対一の対話で話し合う場を設けた。次に、少人数のグループで話し合って意見をまとめる活動を行った。学級全体の場合よりも、グループでの話し合いは、「進んで考えが出せる」「他の人の考えも聞きながらまとめることが、全体よりもやりやすい」と児童も感じているように、話し合って意見をまとめる活動経験の形態としてはふさわしい。学級全体の話し合いでは、グループで決めたことに対しての個人の意見や感想を発表し、それに対してグループが答えたり、または、他の人が付け加えたりという、全体で話し合う形態に広げていくと、活発な話し合いができた。このような学級での話し合いの後に、もう一度グループの話し合いに返した。すると、友達の考えと自分の考えの相違点や共通点を考えながら話し合うことができ、より深まった話し合いになった。

3 話し合う力が付き、伝え合う力が高まったか

(1) 対話の基礎づくり

- ① 「友達とできるだけ長く話そう」では、話題がそれないことを押さえながら、質問をする人と答

える人に分かれ、3分間対話をさせた。それによって、相手意識や目的意識をもった対話ができた。

- ② また、「みんなと話そう」では、一人が話題提供者になり、みんなで話しを膨らませていった。質問者が大勢いるので、質問が重ならないように、よく聞き、考えながら話す力が付けられた。こうした話し合う雰囲気は、受容的な言語環境でもある。

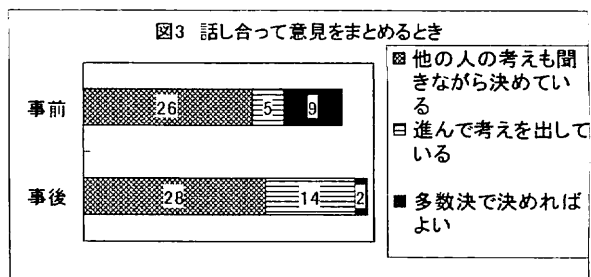
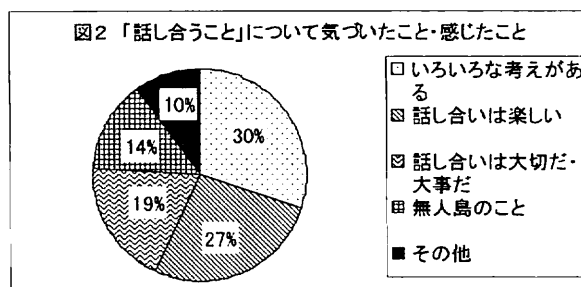
このように、話し合う活動を通して児童は、自分の考えを伝えたい、伝わって嬉しい思いを味わいつつ、互いの考えの相違点や共通点に気付き、よりよい意見にまとめることができるようになってきた。それは、話し合う楽しさを感じることでもある。その経験の積み重ねが、伝え合う力を高めていくものと考えられる。また、話し手による一方向的な説明や報告ではなく、質問や意見なども交えた双方向的な話し合いができるようになってきた。

(2) 話し合う活動の活性化

児童は、それまで、話し合いを通して、「自分が気づかなかったことに気づいているな」とか「他の人の話が分かりやすくてすごいな」とか、他の人の意見に対する感じ方が強かった。しかし、今回の検証授業では、「自分の意見が言えてうれしい」「自分と同じ考えの人がいるのを知ってうれしい」「他の人の考えを聞けてよかった」など、自分の意見や考えと比較した、他の人の意見や考えに対する感想が強くなっていた。このようなことから、一方向的でなく、双方向的なかかわりとしての伝え合う力が身に付いてきたことが分かる。つまり、話し合う活動の楽しさを味わう経験の繰り返しによって、伝え合う力が高まってきたと言える。

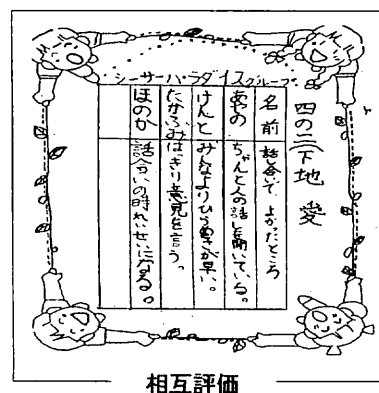
また、活発な話し合う活動を通して児童は、「話し合うこと」についていろいろな気付きをしている(図2)。中には、「話し合うことはみんなといっしょに考えることだと思った。」「話し合うといろんなことが決められることが分かった。」「話し合いをするとみんなに意見が伝わっていることに気づいた。」などの感想があり、話し合いが活発になったことで、よりよい意見をまとめることを実感できたことが分かる。

それから、話し合って意見をまとめるとき、「進んで考えを出している」と「他の人の考えも聞きながら決めている」が伸び、「多数決で決めればよい」が減少した(図3)。児童は、意見をまとめる話し合いの大切さに気付いたようである。



(3) 評価の工夫による、話し合う雰囲気作り

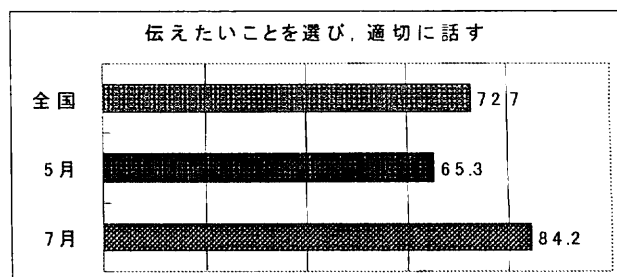
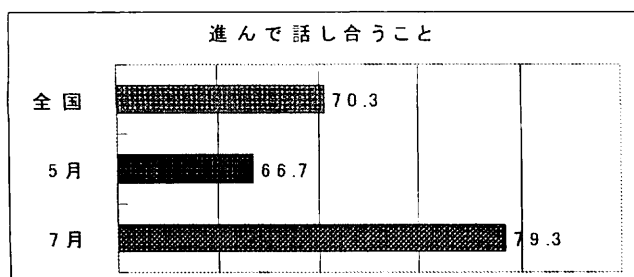
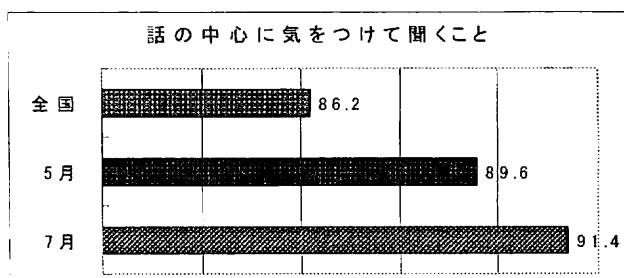
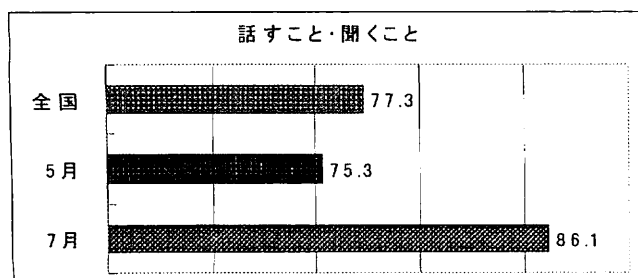
音声言語は、毎時間に「実感としての評価」を行うことが大切である。今回は、ワークシートや相互評価などを活用して、児童の自己評価・相互評価を実施した。自己評価によって、話し合いに進んで参加する態度が見られ、学級で話し合うときの発表も増えた。相互評価に、友達のよい点を書くようにしたことで、それを受けた児童にとっては、自信や励みになったようだった。このような評価によって、互いのかかわりに認め合いや受容的な話し合う雰囲気が見られるようになった。



(4) 『全国標準診断的学力検査 国語』の結果より

5月と7月に『全国標準診断的学力検査 国語』を実施した。その間の6月に本テーマで授業実践を行った。授業では、常に、低・中学年に身に付けたい「話すこと・聞くこと」の基礎的・基本的な力を意識しながら指導するように心がけた。結果は下のグラフの通りで、「話すこと・聞くこと」の領域

における児童の正答率は、事前よりも事後がそれぞれ上がった。各学年の「話すこと・聞くこと」の単元に盛り込まれている『学習の窓』を、その学年の基礎・基本の力ととらえて指導すれば、着実に成果が出るものと推察できる。



V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 児童の興味・関心に合わせた話材を選定することで、みんなが自分の考えや意見を活発に出し合い、話し合いが深まった。
- (2) 多様な学習形態を取り入れることによって、話しやすい場となり、みんなが意見を出し、話し合いが深まり、話し合うことの大切さを味わった。
- (3) みんなが意見を出し合う場が増え、話すこと・聞くこと・話し合うことの基礎・基本の力が付き、伝え合う力が高まった。

2 今後の課題

- (1) 伝え合う力を定着させるための、系統的な年間指導計画を作成する。
- (2) いろいろな目的のために、要点をおさえたメモを取る場の設定と指導の充実を図る。

〈主な参考文献〉

中山厚子著	『子どもが輝く国語科授業 話すこと・聞くこと編』	東洋館出版社	2003年
小森茂／松野洋人編	『キーワードで分かる新国語科』	国土社	2000年
石田佐久馬編集	『聞ける子・話せる子を育てる』	東洋館出版社	1993年
大熊徹・寺井正憲編	『国語科の授業と評価』	教育出版	2002年
瀬川栄志監修	『楽しく学ぶ「話し方・聞き方」ワーク』	明治図書	2003年
高橋俊三編著	『音声言語の指導③話し合うことの指導』	明治図書	1996年
小森茂・相澤秀夫		明治図書	1999年
・田中孝一編著	『スピーチ・対話の学習』		